

私は、豊太郎が手記を書いたのには何か伝えたいことがあったのだろうと感じ、それが気になったため、「なぜ手記を書いたのか」ということをテーマにした。このテーマに対して私は、豊太郎は手記をエリスとその子供に読んで欲しかった、仲の良い人から嫌われたくない性格だったと考え、自分を絶賛している場面がある点、最終的には憎むこととなる相沢を手記に登場させたという点の二点から考察しようとする。このテーマに対する結論は、「エリスとその子供を見捨てた言い訳をするために書いた」ということである。

まず、豊太郎は自分の行動や思いを手記という文章にしている。文章はその時伝えられなかったとしても後からでも読むことができる。またエリスは手記を書いた当時発狂していて、その子供もまだ産まれていない。このことから、豊太郎はエリスとその子供にこの手記を読ませたいということが考えられる。

次に(p287)余は守るところを失はじと思ひて己に敵するものには抵抗すれども、友に対しては否とは答えぬが常なり。(p288)余は己が信じて頼む心へ耐忍してこれを実行することしばしばなり。というところから、自分と仲の良い人や信頼している人から嫌われたくない性格で、自分と仲の良い人の頼み事は無理をしてでも遂行するということがわかる。

一点目について、普通、自分のことを素晴らしい、才能のある人間なのだ、などと書くことは気が引けることだし、そんなことを長々と書かなくても大学法学部に入ったということだけ書いておけば有能であるということはわかることである。しかしこの手記には(p264)旧藩の学館にありし〜某省に出任して、などと自分がいかに有能であるかということが細かく書かれている。このことから、自分がいかに有能であることを強調してエリスとその子供に伝え、豊太郎が仕事を選り日本へ帰っても、有能な人物であったから仕方がないと思わせたかったと考えられる。

二点目について、豊太郎は(p270)弱くふびんな心を。とあるように自分を意志の弱い人物だと考えて批判している。しかし、自分の悪いところを挙げているのはその点についてだけである。また、(p286)弱き心より出でしというところや、豊太郎と同じ大学であったというところから、相沢は豊太郎が仲の良い人の提案を拒否することができないことをしていたと考えられるが、それにもかかわらず豊太郎にエリスと別れるようにいったということ、最後に相沢を憎んでいるということを書いたことから、豊太郎は自分の弱いところを相沢に突かれてあたかも相沢が原因でエリスとその子供を見捨てることになってしまったかの様子に書いている。つまり、自分も確かに悪いところはあったが、結局は相沢が提案を拒否できないのを知りながらも約束させたのが悪いと書いている。

これら二点はどちらも仲の良かったエリスとその子供に嫌われたくないがためのその二人を見捨てた言い訳のようにとれる。だから私はこの手記はエリスとその子供を見捨てた言い訳をするために書いたと考える。